

Color Gallery

ヘッドライン

化学遺産，遺跡をたずねる

日本化学会は、化学と化学技術に関する貴重な歴史資料の保存と利用を推進するため、2005年度より化学遺産委員会を設置し、「化学遺産認定」を行っている。化学に関する学術と教育の向上及び化学工業の発展に資することを目的とする化学遺産認定だが、これらを教育現場で取り上げ、歴史的な流れや工業としての発展を知る機会として今回の企画を立ち上げた。授業での話題としてばかりでなく、学校行事や化学クラブなどの活動で実際に各地の化学遺産や遺跡・施設を訪れるなど、体験授業へ発展させていただいたら幸いである。P4-19



明治22年(1889年)7月、元長州藩長府支藩藩士の豊永長吉が発起人となり、現在の山口県山陽小野田市に民営の無機総合化学会社として、日本舎密製造会社が創立された。「舎密」とは「せいみ」と読み、江戸時代の蘭学者、宇田川榕菴(ウダガワヨウアン)がオランダ語のchemieの当て字で作った「化学」を意味する言葉である。

日本舎密のルブラン法炭酸ソーダ製造法は、アンモニアソーダ法(ソルベー法)が主流となった昭和24年(1949年)に稼働停止し、日産化学小野田工場もソーダ事業から撤退した。写真はそれらの設備解体時に残された塩酸吸収塔跡であり、現在認定化学遺産第004号として保存されている。

P4-7 北嶋 昭「ルブラン法炭酸ソーダ製造と日本舎密製造会社」より

阪急京都線「高槻市」駅を降りると大阪医科大学のキャンパス・病院がある。ここにかつて京都大学の化学研究所があった。1968年に化学研究所は現在の宇治キャンパスに移転したが、跡地は大阪医科大学に引き継がれ、化学研究所研究本館は現在も活用されている。その正面入り口の近くにはビニロン発明記念碑が建っている。

日本で開発・工業化された合成繊維ビニロンというと、京都大学の桜田一郎教授が有名であるが、桜田教授一人によってビニロンが工業化されたわけではない。化学遺産を訪ねると、無念の思いで終わられた多くの先人を知ることができる。その方々の業績とその後の消息を紹介する。

P8-11 田島慶三「ビニロンの化学遺産を訪ねて開発に関与した多くの先人を想う」より

